

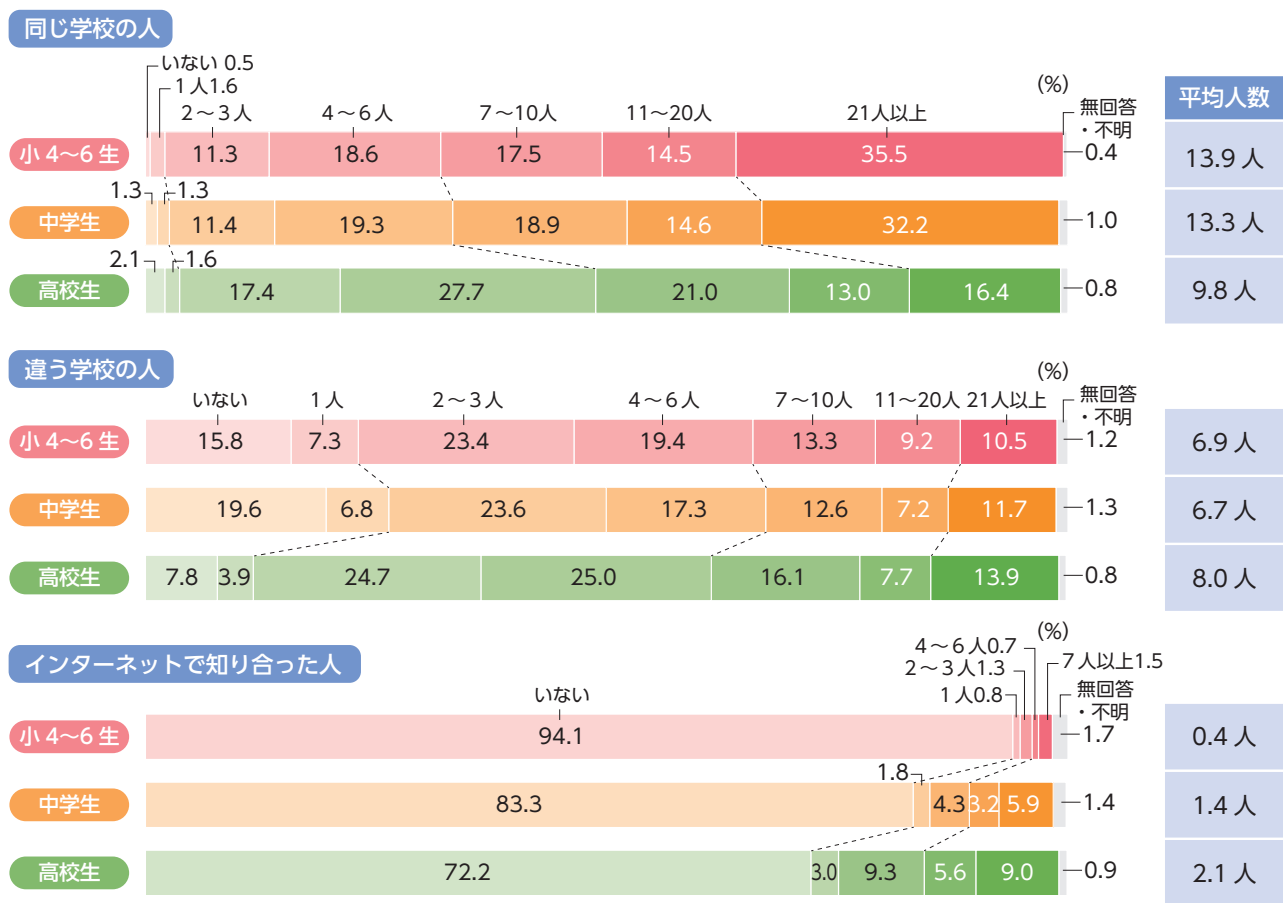
「同じ学校」の友だちの数は高校生ほど少ない

仲の良い友だちの数を尋ねたところ、「同じ学校」の友だちは、小中学生は「21人以上」の比率が高く、平均人数も13人台である。一方、高校生は「4～6人」の比率が高く、平均約10人である。「違う学校」の友だちは、どの学校段階でも「いない」～「21人以上」までばらつきがみられ、平均約7～8人である。「インターネットで知り合った」友だちは、「いない」の比率が高いが、高校生では4人に1人以上が「いる」（「1人」～「7人以上」）と回答している。

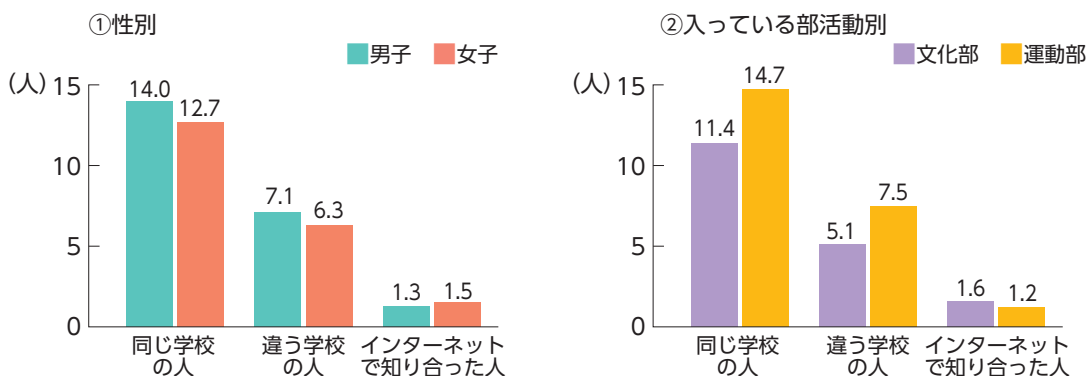


あなたは、次の人のなかに、仲の良い友だちが何人くらいいますか。

子ども 2017 図1-1 仲の良い友だちの数(学校段階別)



子ども 2017 図1-2 仲の良い友だちの数(中学生/平均人数)



注1 「インターネットで知り合った人」の「7人以上」は「7～10人」+「11～20人」+「21人以上」の% (図1-1)。

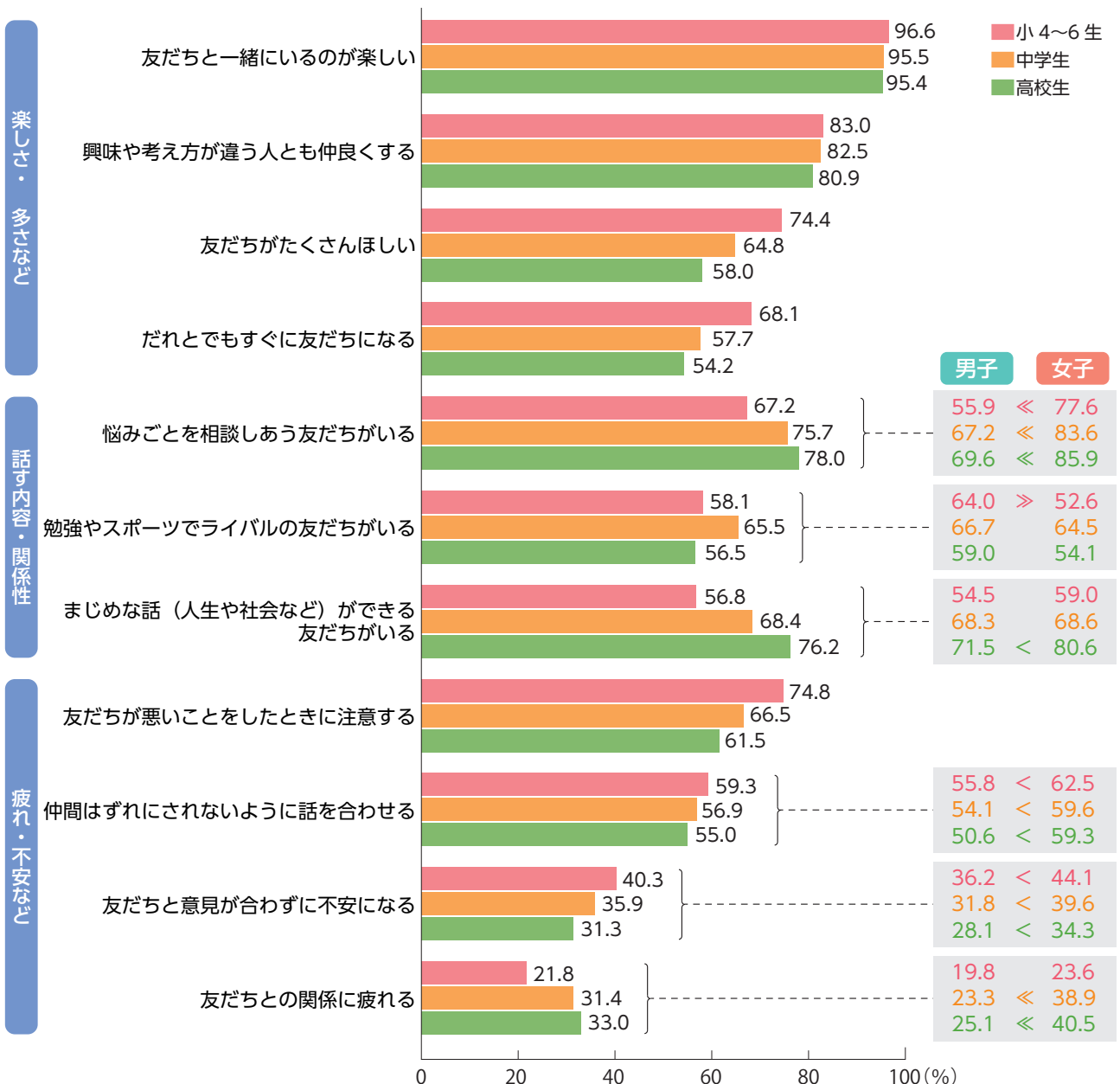
注2 平均人数は、「いない」を0人、「1人」を1人、「2～3人」を2.5人、「21人以上」を25人のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した(図1-1、図1-2)。

「ライバル」は中学生、「まじめな話ができる友だち」は高校生で「いる」の比率が高い

どの学校段階でも、95%以上が「友だちと一緒にいるのが楽しい」、8割以上が「興味や考え方が違う人とも仲良くする」と、友だち関係を肯定的にとらえている。また、「ライバルの友だちがいる」は中学生で、「悩みごとを相談しあう友だちがいる」「まじめな話ができる友だちがいる」は高校生で比率が高い。一方で、中高生では、「友だちとの関係に疲れる」の比率も3割台である。性別にみると、女子は男子に比べて、「悩みごとを相談しあう友だちがいる」の比率が高い一方で、「友だちとの関係に疲れる」の比率も高い。

Q 友だちとの関係について、次のことがどれくらいあてはまりますか。

子ども 2017 図 1-3 友だちとの関係(学校段階別、性別)



注1 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2 いずれかの学校段階で、性別で5p以上差がある場合に、性別の数値を示した。また、10p以上差がある場合は<<>>を、5p以上10p未満の差がある場合は<>をつけた。

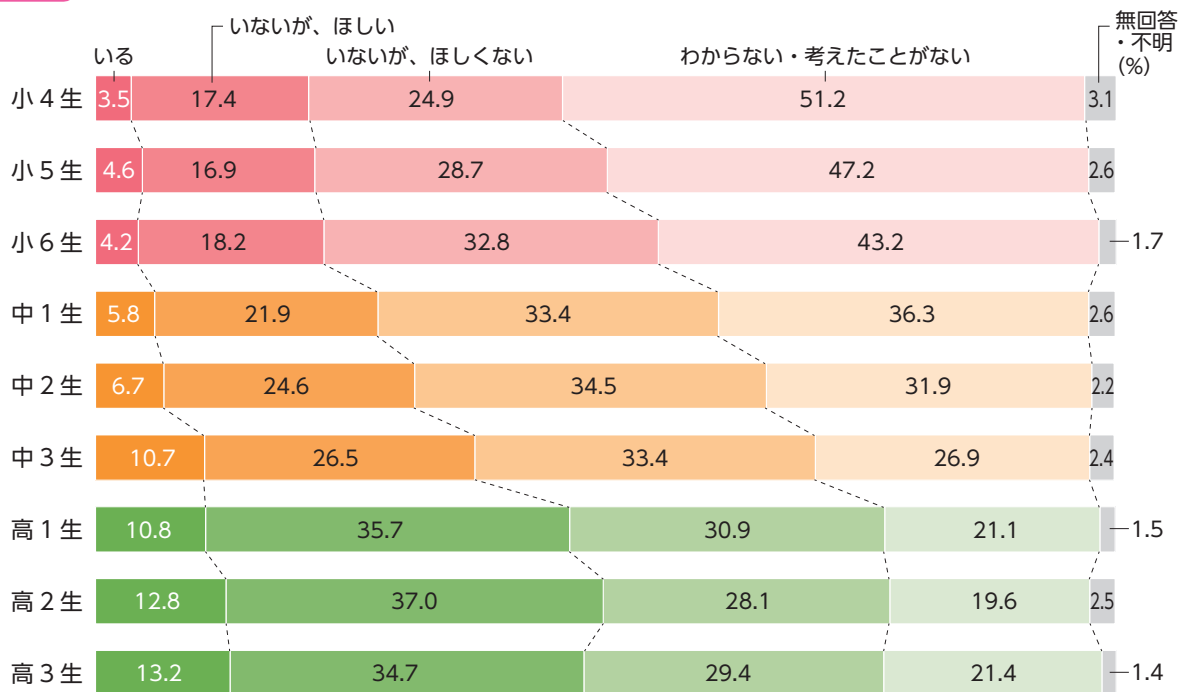
小中学生は、女子の方が、つきあっている人は「いないが、ほしい」と回答

つきあっている人が「いる」の比率は、中3生～高3生で1割強である。また、「いないが、ほしい」の比率は、学年とともに高まり、高校生で3割台となる。一方で、「いないが、ほしくない」の比率は、どの学年でも2～3割台、「わからない・考えたことがない」は、小4生で約半数、高校生で2割前後である。性別にみると、小中学生では、女子のほうが「いないが、ほしい」の比率が高く、男子のほうが「わからない・考えたことがない」の比率が高い。

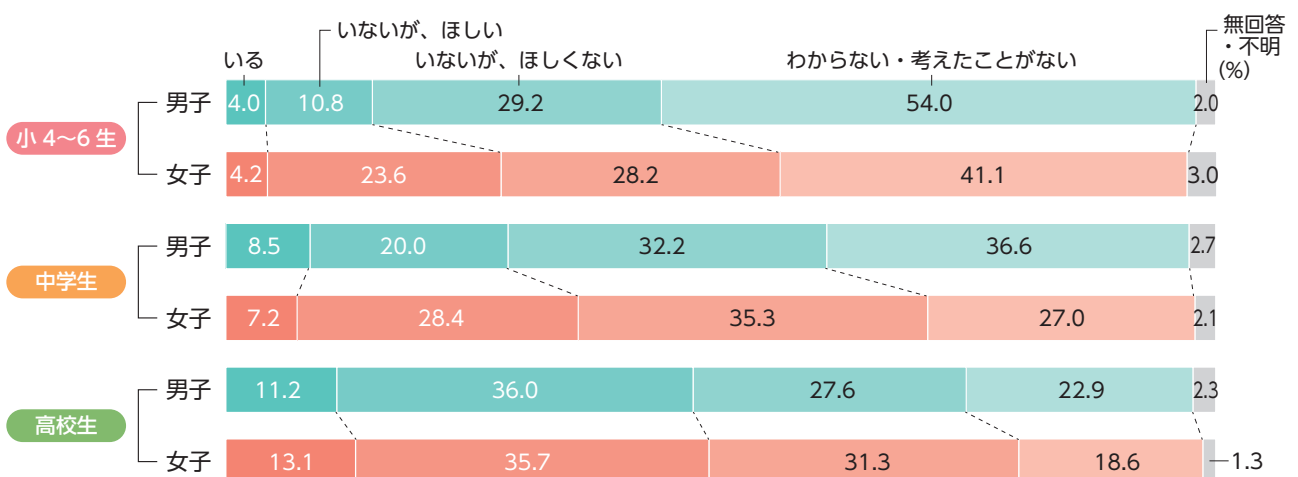


あなたには、今、つきあっている人(彼や彼女)がいますか。

子ども 2017 図2-1 つきあっている人がいるか(ほしいか)(学年別)



子ども 2017 図2-2 つきあっている人がいるか(ほしいか)(学校段階別・性別)



小4～6生は男子、高校生は女子のほうが「親にさからう」と回答

子どもに、「親にさからう」こと、「親に悩みを話す」ことがあるかを尋ねたところ、「親にさからう」ことが「ある」のは6～7割で、中2生～高1生の比率が高い。一方、「親に悩みを話す」ことが「ある」は、小4～5生は6割台であるが、小6生以上は5割台である。性別にみると、小4～6生は男子、高校生は女子のほうが「親にさからう」ことが「ある」の比率が高い。また、「親を超えるような生き方をしたい」かを尋ねたところ、「あてはまる」の比率は7割前後で、小中学生に比べて高校生のほうがやや低い。性別にみると、男子のほうが高い。

Q 人のかかわりについて、次のようなことがどれくらいありますか。

子ども 2017 図3-1 親にさからう・親に悩みを話す (学校段階別、学年別)

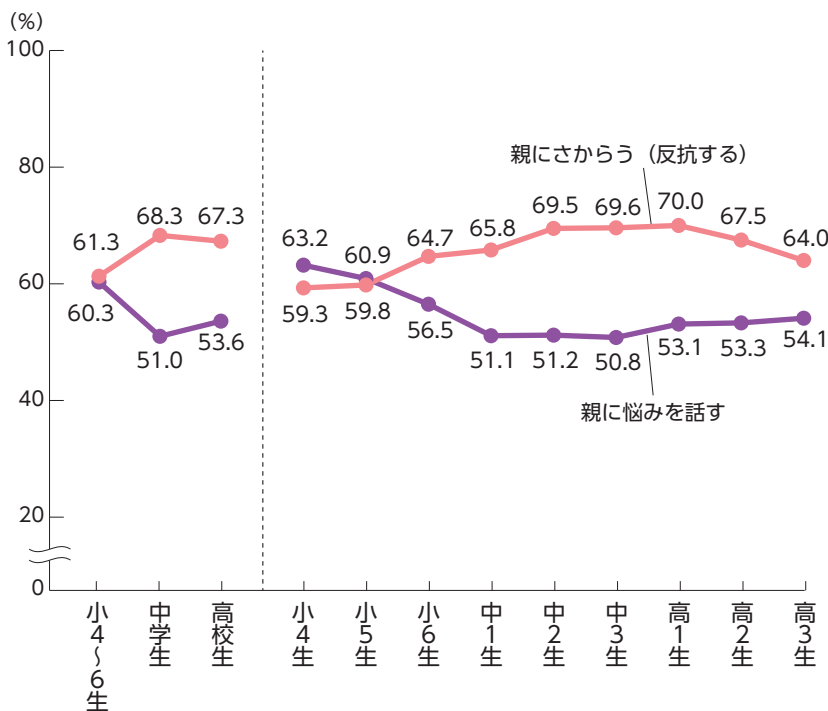
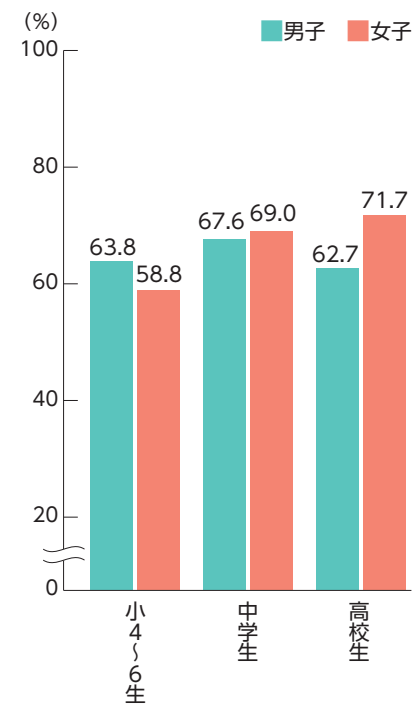
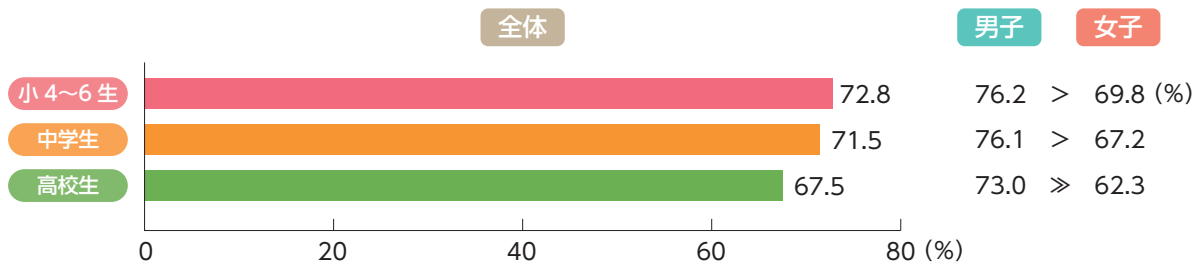


図3-2 親にさからう (学校段階別・性別)



Q あなた自身の将来について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

子ども 2017 図3-3 親を超えるような生き方をしたい (学校段階別、性別)



注1 「よくある」+「ときどきある」の% (図3-1、図3-2)。

注2 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の% (図3-3)。

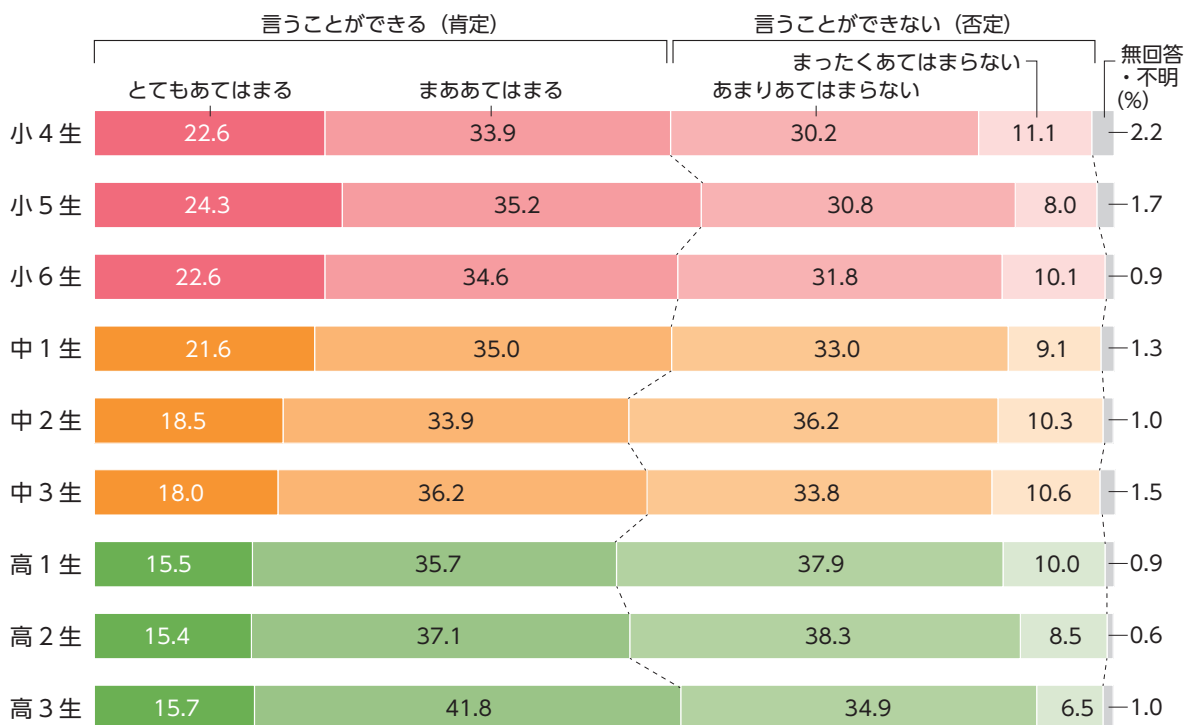
注3 性別で10p以上差がある場合は>>を、5p以上10p未満の差がある場合は>をつけた(図3-3)。

2年の間に、自分の長所を言うことが「できる→できない」「できない→できる」と変化した子どもが約5割

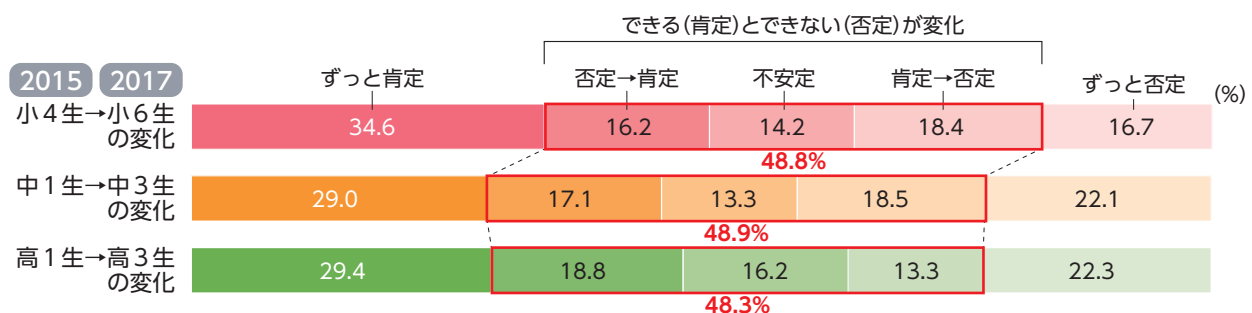
「自分の良いところが何かを言うことができる」かを尋ねたところ、「言うことができる」(肯定)は5割台、「言うことができない」(否定)は4割前後である。しかし、同じ子どもに2年前(2015年)、1年前(2016年)、現在(2017年)と同じ内容を尋ねて変化をみたところ、「自分の良いところが何かを言うこと」が「できる」をずっと維持している子ども(ずっと肯定)は3割前後、「できない」のままの子ども(ずっと否定)は2割前後で、残りの約5割は「できる」(肯定)、「できない」(否定)が変化している。

Q あなた自身のことについて、次のことはどれくらいあてはまりますか。

子ども 2017 図4-1 「自分の良いところが何かを言うことができる」かどうか(学年別)



子ども 2015-2017 図4-2 「自分の良いところが何かを言うことができる」かどうかの3時点(2年間)の変化(小6生・中3生・高3生)



注1 「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を「肯定」、「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」を「否定」としている(図4-1、図4-2)。
 注2 2015年、2016年、2017年の3時点で、同じ子どもに同じ内容を尋ねて変化をみたもの。2017年の小6生、中3生、高3生の結果のみを示している。「否定→肯定」は「否定→肯定→肯定」+「否定→否定→肯定」の%。「肯定→否定」も同様。「不安定」は「肯定→否定→肯定」+「否定→肯定→否定」の%。3時点のいずれかが無回答・不明の場合は除いている(図4-2)。

将来目標が「明確」になった子どもは、ずっと「不明確」の子どもに比べて、自分の長所を言うことが「できる」ように変化

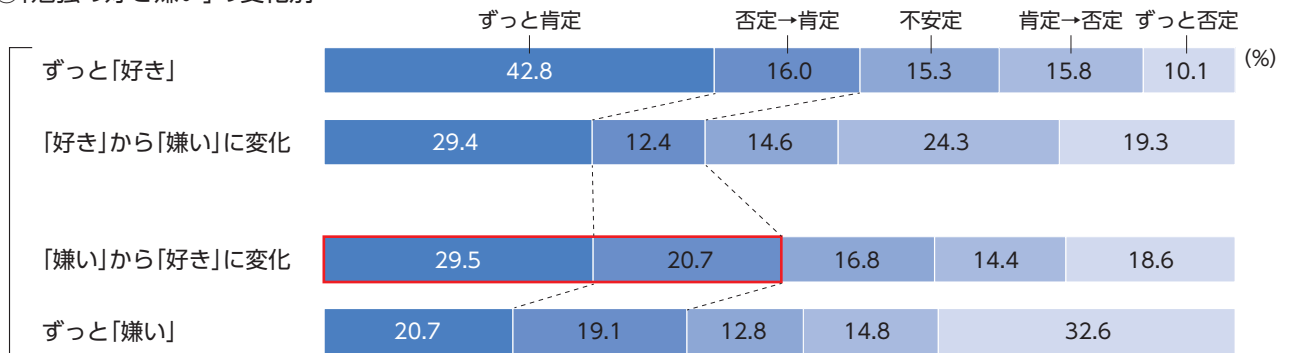
図4-2でみた「自分の良いところが何かを言うこと」が「できる」「できない」の変化には、勉強への意識の変化や、目標の明確さの変化などが関連している。例えば、勉強が「嫌い」から「好き」に変化した子どもは、勉強がずっと「嫌い」の子どもに比べて、「ずっと肯定」（「自分の良いところが何かを言うことができる」を維持）の比率が高く、また、他の子どもに比べて「否定→肯定」（言うことが「できる」ように変化）の比率も高い傾向がある。同様に、将来目標が「明確」になった子ども（「不明確」から「明確」に変化）は、将来目標がずっと「不明確」な子どもに比べて、「ずっと肯定」や「否定→肯定」の比率が高い。



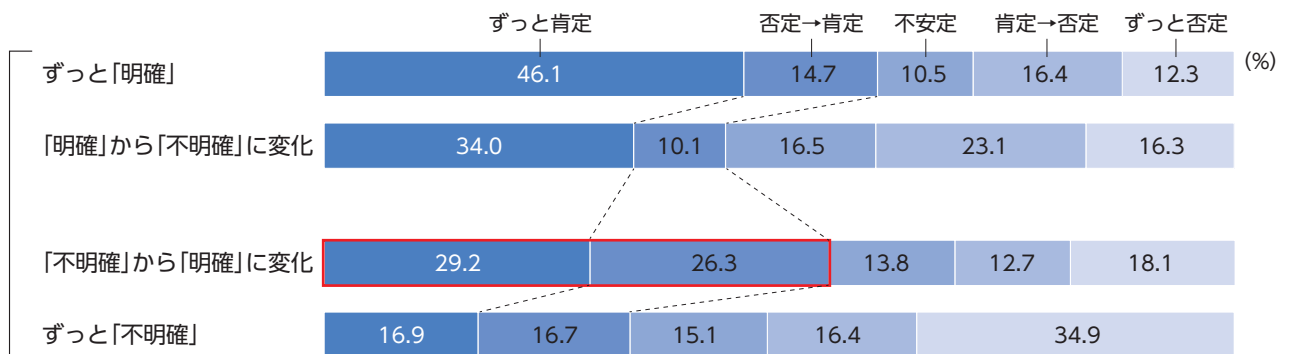
あなた自身のことについて、次のことはどれくらいあてはまりますか。

子ども 2015-2017 図4-3 「自分の良いところが何かを言うことができる」かどうかの3時点(2年間)の変化(小6生・中3生・高3生の合計)

①「勉強の好き嫌い」の変化別



②「将来目標がはっきりしているかどうか」の変化別



注 ①「勉強の好き嫌い」の変化、②「将来目標がはっきりしているかどうか」の変化は、それぞれ2015年、2016年、2017年の3時点で、同じ子どもに同じ内容を尋ねて変化をみたもの。「不安定」なケース(①で「好き→嫌い→好き」「嫌い→好き→嫌い」と変化、②で「明確→不明確→明確」「不明確→明確→不明確」と変化)は、図から省略している。